十字軍の幻影

近藤　剛

1．十字軍の亡霊

イメージとは，それまでに流布されてきた言説の積み重ねによって構成されていくものである。いったん定着してしまうと，たとえそれが歴史的な実態から遠くかけ離れていると説明されても，なかなか修正されることはない。強く思い込まれたイメージは，容易に既成事実化されてしまう。ましてそれが負のイメージであれば，なおさらに払拭されがたく憎悪の増幅に一役買うこともある。例えば，宗教戦争のイメージについて尋ねたら，多くの人が十字軍（crusade）を思い浮かべるのではないか。

20 世紀末，半世紀にわたって対立し，緊張状態にあった東西冷戦が終結し，自由民主主義と市場主義経済の勝利が確信された。国際社会の恒久的な平和と安定が期待され，夢と希望に満ちた新世紀の扉が開くはずだった。ところが，21 世紀の幕開けは前代未聞のテロリズムによる恐怖の拡散から始まることになった。無辜の命を奪う波状的な攻撃が加えられ，世界には大いなる暗雲が垂れ込めた。それは 2001 年 9 月 11 日のことだった。テロリストによってハイジャックされた旅客機二機がニューヨークの世界貿易センタービル 2 棟に，さらに別の一機がワシントン郊外の国防総省に突入し（もう一機はペンシルベニア州で墜落），死亡者 2977 人，負傷者 25000 人以上というアメリカ史上最悪の同時多発テロ事件が起こった。

自宅でテレビを見ていた筆者は，ニューヨークで航空機の衝突事故があったとの第一報をニュース速報で知り驚いた。現地映像に切り替わった画面では，ちょうど二機目が世界貿易センタービルに激突するシーンを映し出した瞬間であり，テレビ越しとはいえ身震いしたことを覚えている。そして，これが偶発的な衝突事故ではないことを即座に予感した。湾岸戦争の時にも大規模な空爆のシーンが生中継されており，お茶の間から（恰もゲーム感覚で）大量破壊の瞬間を見られることに慄然としたが，それ以上

に衝撃的だった。

その後，このテロ攻撃の実行犯としてイスラーム過激派組織アルカイダが特定されることになるのだが，その首謀者と目されたウサーマ・ビン・ラーディンは 1998 年 2 月から国際テロ・ネットワーク「ユダヤ教徒・十字軍に対する聖戦のための国際イスラーム戦線」を掲げて，西洋諸国に対抗するためイスラーム世界の結束を呼びかけ，グローバル・ジハード運動を喧伝していたのである。これは世界の構図を十字軍時代に戻すという時代錯誤的な発想にちがいなく，荒唐無稽な対立の図式に易々と乗せられてはならないはずだったが，当時のアメリカ合衆国大統領ジョージ・W・ブッシュはそれに呼応するかのように「テロ行為に対する十字軍」を唱えて（2001 年 9 月 16 日），アルカイダを保護下に置いていたタリバン政権を崩壊させるべくアフガニスタン侵攻（2001 年 11 月）に乗り出した。さらに，いわゆる「ならず者国家」に対する「予防的先制攻撃」を自衛権の行使として容認する「ブッシュ・ドクトリン」のもと見当外れなイラク戦争（2003 年 3 月）へと突き進んだ。これを受けてスンニー派の最高権威機関アズハルは，イラクへの攻撃を「新十字軍」による侵略行為であり，それに抗戦することはジハードに他ならないとの声明を発表した。

混乱する中東諸国から十字軍のレッテルを貼った対米嫌悪のスローガンが放たれるのを見て，かつての亡霊が歴史的な怨念とともに甦り，ふたたび世界を宗教戦争に陥れるのではないかと錯覚されても不思議ではなかった。山内進も指摘しているように「十字軍という言葉は過去の遺物ではない。肯定するにせよ否定するにせよ，十字軍という言葉がなお強い政治的メッセージとしての性格と力をもっているのは確かである」[1]。日本人には心情的に分からないことかもしれないが，キリスト教にとってもイスラームにとっても十字軍という言葉には何か特別な響きがあり，その歴史的な因縁を紐解くことは国際社会の在り様を読み解く上で避けて通れないことのように思われる。

一般的に理解されているところでは，十字軍とはローマ教皇の呼びかけ

---

[1] 山内進（2017 年）『増補　十字軍の思想』ちくま学芸文庫，15 頁。

のもと異教徒から聖地エルサレム[2]を奪回するために結成されたキリスト教徒の軍隊であり，その遠征は 1095 年から 1291 年までおよそ 200 年間にわたって展開されたものだと言われている。文化史的には，イタリアの詩人トルクァート・タッソの叙事詩『エルサレム解放』に見られるような勇猛果敢な騎士物語，華麗なロマンス，中世の騎士道精神といった描写が十字軍を特徴付けており，それらはオペラや絵画を通じてキリスト教の歴史絵巻として記憶されてきた。しかし，その実態はそれほど単純なものではないし，200 年間にもおよぶ歴史的事象の評価も容易ではない。結論を先取りすれば，十字軍は必ずしも聖地エルサレムを目指していたとは言えず，多方面にわたって展開された西方世界の一大キャンペーンとして広く捉える必要があるように思われる。

現代における十字軍の評価にしても，対照的なものが見受けられる。その典型がカレン・アームストロングとロドニー・スタークの見解である。アームストロングは西洋キリスト教世界の領土拡張主義ないし帝国主義の萌芽を中世の十字軍に認め，それによるイスラーム世界への掠奪と蹂躙を批判し，「十字軍は今日の中東紛争の直接の要因のひとつであると信じている」[3]と主張している。これは湾岸戦争当時の議論でもあり，多少のバイアスがかかっていることも否めないが，人口に膾炙した認識を示していると思われる。その論調に対して，スタークは「十字軍はイスラーム世界からの挑発，具体的には西洋世界を植民地にするための数世紀にわたる流血を伴う試みや，突如として起こったキリスト教徒巡礼者や聖所への攻撃によって引き起こされたのである」[4]と反論している。十字軍は西洋の軍事的な帝国主義の開始を告げるものではなく，あくまでもキリスト教徒にとっては贖罪のための宗教的行為だったと理解するべきで，またイスラーム

---

[2] 638 年に第二代正統カリフのウマルによって征服されて以降，エルサレムではキリスト教徒の安全と教会の保護は保障されていた。ムハンマドのミラージュを記念する岩のドームとアクサ・モスク（ハラム・アッシャリーフ）が建造されたのは，ウマイヤ朝の時代のことである。

[3] カレン・アームストロング著，塩尻和子・池田美佐子共訳（2001 年）『聖戦の歴史―十字軍遠征から湾岸戦争まで―』柏書房，14 頁。

[4] ロドニー・スターク著，櫻井康人訳（2016 年）『十字軍とイスラーム世界―神の名のもとに戦った人々―』新教出版社，21 頁。

側に憤怒の感情が中世以来ずっと底流し続けたと考えることは不適切だと主張する（そもそもイスラームは十字軍を撃退した勝者であるのだから）。実際，西洋への敵愾心と十字軍の歴史を関連付けた発想はオスマン帝国のスルタンだったアブデュルハミト 2 世から始まるものとされ，第一次世界大戦後の英仏の帝国主義的膨張と植民地主義政策，および第二次世界大戦後のイスラエル建国によって駆り立てられた「20 世紀の創造物」[5]であると指摘される。さらに，十字軍の負のイメージは汎イスラーム運動を盛り上げるため，アラブのナショナリストによって煽られたものであり，それを中東諸国における反キリスト教，反欧米感情の歴史的起源と見なすことはできないと主張される。

ある歴史的事象をめぐって，私たちは漠然としたイメージに振り回されたり，思い込みにより思考停止に陥ったり，創作された偏見に惑わされたりすることがあるが，そのような姿勢は努めて改められるべきである。本稿では，宗教戦争というレッテルによって全てを単純化する態度を反省し，今日の煽動的な宗教対立を解消させるため，これまでの研究史の整理とともに十字軍の実態とその問題点を明らかにする。

２．十字軍の前史

十字軍の歴史を概観するため，最小限の予備的考察から始めよう。地中海世界の覇権を握った古代ローマ帝国も，皇帝テオドシウス 1 世の没後に分裂してしまった（395 年）。統治領域が東西に分割されるとともに，国教化されたキリスト教もローマ・カトリック教会と東方正教会に分かれて発展を遂げることになる。

便宜的に西ローマ帝国と呼ばれる領域は，ゲルマン人の傭兵隊長オドアケルによって征服され（476 年），その後の国家運営はフランク王国メロヴィング朝に移行する。が，カロリング朝末期のヴェルダン条約（843 年）を経て，この地域は西フランク，中フランク，東フランクへと分割され――それぞれフランス，イタリア，ドイツ（神聖ローマ帝国）の前身を成すと

[5] 前掲書，354 頁。

大雑把にまとめることができるだろう――，その後も分裂と統合が繰り返される。そうした混沌にあっても西方世界に帰属しているのだという統一的な意識をもたらせていたものが，ローマ・カトリック教会に連なるキリスト教信仰だった。

東ローマ帝国（ビザンツ帝国）と呼ばれる領域では 1453 年のオスマン帝国によるコンスタンティノープル占領まで統治を存続させることになるが，当然ながらその間には栄枯浮沈があった。6 世紀にビザンツ皇帝ユスティニアヌス 1 世が地中海一帯の領土を回復するものの，7 世紀にイスラーム勢力が領土を拡張し，その影響によってシリア，エジプト，北アフリカの支配権は失われた。イスラームの覇権は伸張し続けて，もともとキリスト教圏であった中東，エジプト，北アフリカ，スペイン，南イタリア，地中海の島々（シチリア，コルシカ，キプロス，ロドス，クレタ，マルタ，サルディーニャ）をも席捲し，世界地図を塗り替えた。ビザンツ帝国は 10 世紀末から 11 世紀にかけて一時的に勢力を回復したものの，内政の不安定化とともに徐々に弱体化していった。

要するに，中世のヨーロッパ世界は政治的にも宗教的にも分断されており，台頭するイスラーム勢力に対して防戦一方であった。むしろ，度重なる侵略によって劣勢に置かれていたと言うことができる。中央アジアから西アジアにかけて支配圏を拡大したイスラームのセルジューク朝は，ビザンツ帝国内のアナトリアに侵攻し，マラジギルトで激戦を繰り広げた。この戦いに惨敗したのはビザンツ帝国であり，これが 1071 年のことである。イスラームの脅威に危機感を募らせたビザンツ皇帝アレクシオス 1 世コムネノスは西方のフランドル伯ロベール 2 世に宛てて傭兵の提供を要請することになるのだが，これが十字軍の遠征を招く契機となる。

前述したように西方ではカロリング朝の崩壊後，群雄割拠の時代が続き，各地の諸侯（封建領主）が領土争いを繰り広げるフェーデ（私戦）が頻発していた。弱体化した王権では地方領主のフェーデを鎮静化させられず，それに代わって平和の実現を求めたのが弱者救済を説く教会であった――10 世紀末の南フランスで始まったとされる「神の平和」運動から一定期間の武力行使を禁じる制度的な「神の休戦」へ――。世俗の国家や民族

を超える普遍的で単一的なキリスト教徒の共同体，すなわち「キリスト教世界」(Christianitas) をローマ教皇のもとで実現しよう，そのためには教権が俗権を主導すべきであるといった機運が高まってきた。その代表的な事例が聖職叙任権闘争であり，教皇グレゴリウス 7 世と神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ 4 世との間で争いが繰り広げられた。同時に教会内部における腐敗の摘発も推し進められ，シモニア（聖職売買）やニコライズム（妻帯，性的放縦）といった悪弊が戒められた。「神の平和」運動によりフェーデは禁止され，戦場という居場所を失った騎士たちの先行きが不透明になったところへ，ビザンツ帝国からの援軍要請が重なり，対外的な遠征の機が熟していく。

３．十字軍の大義

1095 年 11 月 27 日，クレルモン教会会議の期間中に，教皇ウルバヌス 2 世はビザンツ帝国からの支援の要請を受け，参集していた司教と修道院長に向けて次のような宣布を行った。演説の内容については 4 種類の同時代史料が現存しているとされるが，ここではジャン・リシャールが採用しているフーシェ・ド・シャルトル『エルサレム史』から引用する。「実際，汝らのほとんどがすでに知っているように，ペルシアから来た部族，トルコ人が兄弟たちの国々を侵略した。・・・多くの者がトルコ人の刃にかかって倒れ，また多くの者は奴隷の身分に貶められた。これらトルコ人は教会を破壊している。彼らは神の王国を蹂躙している。もし汝らが何もせず，今度もじっとしているならば，神の信者たちのもっと多くがこの侵略の犠牲になるであろう。それ故，われ――しかし，これを汝らに勧告するのはわれではなくて，主自らである――は，次のことを汝らに勧告し懇願する。それは，キリストの使者である汝らがすべての者たちに，その者が社会のいかなる階層に所属していようと，騎士であれ歩兵であれ，金持ちであれ貧乏であれ，汝らの弛まざる説教によってキリスト教徒の救援に即刻赴き，この忌まわしい民族を我々の領土から遠くへ押し返すよう説得することである。神がこれを命じているとわれはここに同席する人々に言う。・・・この救援に参加し，陸上であれ海上であれ，その途次で倒れる者すべてに，

そして異教徒との戦いで落命する者すべてに罪が赦免されるであろう。そしてわれはこの赦免を，われが神から保有している権威によって，この徒行に参加する者たちに授与する。もしこれほどまでに軽蔑され，堕落した悪魔の奴隷である民族が，神の信仰に専心し，キリスト教徒の名を誇りとする民族をうち負かすようなことがあれば，それは何という恥辱か。もし汝ら自身を含め，キリスト教徒の名に値する者を見いださないとするならば，主自らが汝らにいかなる非難を発することか。したがって，今日まで信者に多大の損害を与え，不正な私戦に明け暮れていた者たちは異教徒との戦い――これは始められるに値し，そして勝利に終わらせるに値する戦いであるが――に参加せよ。・・・出発を望む者は一刻の猶予も許されない。財産を担保に，旅に必要な費用を調達し，冬と春が過ぎると同時に，神のお導きに従って出発せよ」[6]。

このウルバヌス 2 世の演説とその後の巡回は，西方の人々の間で宗教的情熱を沸き立たせるのに奏功した。遠征の主眼は，セルジューク・トルコの侵略によって塗炭の苦しみにある同胞（東方キリスト教徒）の救援に置かれている。リシャールによれば，十字軍の呼びかけの根幹には「兄弟愛」がある。それは争乱から弱者を救済する「神の平和」運動にも通底する精神である。リシャールは「十字軍は平和の制度として，キリスト教会の弱者に対する憐憫と弱者が強者の暴力から免れる秩序の確立への願望とから生まれた。異教徒は強盗をはたらく騎士や掠奪にはしる領主と同類である。異教徒から東方のキリスト教徒を守ることが，西ヨーロッパの「圧制者」から農民，修道士，商人を守ることと同様に重要である」[7]と述べている。

肝心なことはキリスト教の兄弟愛，神の平和，その延長線上に軍備を伴った巡礼の行進が位置付けられているということである。リシャールは次のようにも指摘している。「十字軍精神の基本構成要素として記憶にとどめるに値するのは，兄弟愛のテーマだけである。窮乏のなかにある人々へ

---

[6] ジャン・リシャール著，宮松浩憲訳（2004 年）『十字軍の精神』（りぶらりあ選書）法政大学出版局，58-59 頁。
[7] 前掲書，19-20 頁。

の援助があとに加わるが，十字軍は何よりも危機に瀕した兄弟たちに対する救済義務を実行するものである」[8]。

この兄弟愛と並んで重要なのが，聖所の神聖さに対する意識と，罪責に対する意識である。地上のエルサレムは，まさに天上のエルサレムに模されるが，聖所は異教徒の存在によって汚されている。この汚染への嫌悪感は，キリスト教的な浄化思想によって裏打ちされる。この状況は自らが犯した罪の代償ではないのか，一刻も早く聖地を回復することが求められるのではないか。聖地の奪回へと駆り立てられた宗教的情熱の根底には，罪深さの自覚とその贖いを求める敬虔な願望があったと考えられる。この点について，リシャールの見解が興味深い。「十字軍精神の形成に最も力強く貢献した感情は，「罪の意識」である。聖地エルサレム喪失に敏感に反応した人がいるとすれば，その喪失が人間の罪の結果と思われたからであり，したがって神が彼らの過ちが一層明白になるように，人間にそれを科すことを願われたからである。・・・諸聖所の陵辱は罪深い魂の陵辱を反映していた」[9]。

スタークの分析によれば，十字軍は侵略的な意図を全面的に打ち出した軍事遠征ではなかった。多額の戦費も，現地人からの収奪や占領地からの搾取によって賄ったのではなかった。経費の大部分は遠征に加わった領主や騎士の自己負担からなり，西方社会の人的，財政的基盤に依存していたという。つまり，十字軍は教皇の呼びかけに応え，教会のために働くことによって得られると信じられた贖罪の宗教的行為に他ならなかった。アンドリュー・ジョティシュキーも「十字軍運動は何よりも霊的報酬への期待によって支配された宗教活動だった」[10]と述べている。

教皇の呼びかけによる正規の十字軍が展開される以前に，先発隊として出発した部隊がある。隠者ピエールの勧説により熱狂に駆り立てられて集まった民衆十字軍はその典型であるが，トルコ人の領地で全滅している。

8　前掲書，25-26 頁。
9　前掲書，30 頁。
10　アンドリュー・ジョティシュキー著，森田安一訳（2013 年）『十字軍の歴史』（刀水歴史全書 86）刀水書房，12-13 頁。

ドイツ十字軍（フォルクマール司祭，ゴットシャルク修道士，ラインラントの貴族エミーコ・フォン・ライジンゲンが部隊を率いた）は各地で放火や掠奪を重ね，ライン川沿岸でユダヤ人を虐殺するなど乱暴狼藉を働いたため，在地の軍隊によって撃退され，またハンガリーを通過する際に全滅する始末であった。この見るも無残な現象は直接，十字軍の目的に関わりのないことかもしれないが，沸き上がった時代のエートスに触発されたことにはちがいないだろう。

正規の十字軍は 1096 年から 1099 年にかけて出征するが，便宜上これを第一回十字軍と呼んでいる[11]。前述したように，これは純粋な宗教的動機から行われたと考えられもするし，当時の西方社会の人口増加も背景をなしており，領主や騎士の領土拡張の野心があったことも否定できない。もともと十字軍と言っても，指揮命令系統が一本化された大規模な軍隊が組織されたわけではなく，各地の諸侯がそれぞれの思惑で出発したと考えられている。参加の動機も様々であり，例えば，①十字軍の本来の意図に忠実であるとされるのがフランドル伯ロベール 2 世，南フランスの大領主トゥールーズ伯レーモン・ド・サン・ジル（トリポリ伯国を建国），②東方に領地の獲得を求めたとされるのが南イタリアの征服者ノルマン人ロベール・ギスカールの子ボエモンド（アンティオキア公国を建国），③政治的な判断から参加したとされるのがフランス王フィリップ 1 世の弟ユーグ・ド・ヴェルマンドワ，イングランドを征服したウィリアム征服王の長男ノルマンディー公ロベールなどの諸将である。北フランスから参加したブーローニュ伯ウスターシュ 2 世の三人の息子たち，長男のウスターシュ 3 世，次男のゴドフロワ・ド・ブイヨン，三男のボードワン（エデッサ伯国を建国）には三者三様の理由があったとされる（十字軍に熱心でない長男，領地経営に行き詰った次男，還俗して立身を求めた三男）。エルサレムへ遠征する途上の地で建国されたエデッサ伯国，アンティオキア公国，トリポリ

---

[11] 十字軍の回数の数え方，また回数を数えること自体にも議論がある。例えば，八塚春児（2008 年）『十字軍という聖戦―キリスト教世界の解放のための戦い―』日本放送出版協会，198-200 頁を参照のこと。ここでは専門研究を意図していないので，通説を踏襲しておきたい。

伯国といった「十字軍国家」では，興味深いことに東方キリスト教徒のみならず現地の大勢のムスリムも取り込んで共存的な国家運営が行われていたという。

十字軍の主要な軍勢がエルサレムへ到着したのが 1099 年 6 月のことだった。激しい攻防戦によって征服にはおよそ一カ月を要したが（抵抗したのはムスリムのみならず，ユダヤ教徒，東方キリスト教徒も含む），当初の目的は果たされてブーローニュ伯の三男ボードワンが初代のエルサレム王に即位した。ここに十字軍によるエルサレム王国が成立する。第一回十字軍には，宗教的情熱に駆り立てられた信心深い人々，経済的欲望を満たそうとした営利的な人々，政治的動機によりやむを得ず参戦した人々など，聖と俗の利害の交錯が見受けられる[12]。

以上，時系列に沿って少し整理したに過ぎないが，私たちが漠然と持っている十字軍のイメージを払拭するには十分だろう。なお，この十字軍の進攻に対するイスラーム側の反撃はファーティマ朝により行われるが，中途半端な状態に終わる。その後，ザンギー朝の創始者イマードゥッディーン・ザンギーが十字軍と向き合うのも聖地の支配権を争ってのことではない。ザンギー自身の覇権を拡大していく中で，アンティオキア公国，エデッサ伯国といった十字軍国家と衝突したことに起因する。ザンギーによってエデッサが陥落したことに対して，教皇エウゲニウス 3 世が軍隊の派遣を決定し（1145 年 12 月），クレルヴォー修道院長の聖ベルナールの勧説によって第二回十字軍が起こる。フランス王ルイ 7 世，ドイツ王コンラート 3 世が出征するも（1147 年 5 月），攻撃目標と定めたダマスクスの攻略に失敗して撤退する（1148 年 7 月）。

イスラームが聖地の奪還に本格的に乗り出すには，サラディン（サラーフッディーン）の登場を待たねばならなかった。ファーティマ朝の宰相だ

12　この点について，八塚春児は次のように述べている。「理念に忠実だった者もいれば，もっぱら自分の領地獲得に汲々として，エルサレムのことなど念頭にないとしか思えぬ者もいた。もちろん，文字通り両者が並存していた者もいたし，中には，その時々によって両者の間を揺れ動いていた者もいる。それらさまざまな性格のうち，どれがもっとも一般的であるとか，どれが主流であるとか，決して単純化できないほど多種多様なのである」（前掲書，105 頁）。

ったサラディンはアイユーブ朝を創始し，支配下に置いたエジプト，シリア，ジャズィーラの諸侯にジハードを呼びかけ，十字軍の撃退に向けた猛攻を開始する。サラディンはヒッティーンの戦いで大勝し，エルサレム王ギ・ド・リュジニャンを捕虜にし，1187 年 10 月にはエルサレムへの入城を果す。これに対して教皇グレゴリウス 8 世が招集したのが第三回十字軍であり（1187 年 10 月），イングランドのリチャード 1 世（獅子心王），神聖ローマ皇帝フリードリヒ 1 世（赤髭帝），フランスのフィリップ 2 世（尊厳王）の三巨頭が遠征に加わった。だが，フリードリヒ 1 世は小アジア横断中にセレフ川で溺死し到達できなかった。アッコン包囲戦以後はリチャード獅子心王と英雄サラディンの激闘が繰り広げられ，1192 年 9 月に休戦協定が締結されて幕を閉じる[13]。その結果として，エルサレムでは各宗派の安全が保障された（アイユーブ朝，マムルーク朝，オスマン朝も基本的に聖地を保護する立場だった）。相互にエルサレムへの通行の自由を認め合い，キリスト教徒の巡礼は可能になったが，西方の悲願である聖地の奪回は叶わないままだった。

4．十字軍の迷走

ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂を訪ねるとファサードの上に 4 頭立ての馬の銅像「勝利のクアドリガ」（現在，設置されているのはレプリカ）が目に入る。これはもともとビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルの競馬場に飾られていたものであるが，なぜ遠く離れた場所に移されているのか。

1198 年 1 月，教皇インノケンティウス 3 世が軍事支援の要請に基づかないで軍を招集する。一般的に，これがヴェネツィア共和国の商業的利益を狙ったコンスタンティノープルの征服で知られる歴史上悪名高い第四回十字軍である。「サン・マルコの馬」は，この時に掠奪された戦利品なのである。第四回十字軍の悪行について，ジョナサン・フィリップスは次の

---

13 十字軍を扱ったリドリー・スコット監督作品「キングダム・オブ・ヘブン」（2005 年）において，ハッサン・マスードの演じるサラディンがエルサレムの価値を尋ねられた時に「無であり，全てだ」と答えたのは印象的である。

ように述べている。「一二〇四年四月，第四回十字軍はコンスタンティノポリスを征服し，略奪しつくした。ある目撃証人の記述によれば，人でなしの十字軍戦士は「神聖なものを踏みにじる狂人」であり，「敬虔な乙女にさえ情けをかけない」人殺し，祭壇を叩き壊して貴重品を強奪する「反キリストの前触れであり，先がけてその邪悪さを実践する代理人」だったという。それからおよそ八百年後の二〇〇一年夏，ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は異例の声明を発した。この第四回十字軍による恐ろしい殺戮について，ギリシャ正教会に謝罪したのである。「キリスト教が自由に聖地へ往来できるようにするという目的をもって出立しながら，結果として，彼らが信仰上の兄弟と相争う結果になったのは，じつに悲しむべきことである。彼らがラテン人のキリスト教徒だったという事実に，カトリック教会は深く遺憾の意を表する」。過ちをめったに認めないカトリックの通弊からして，教皇がこのような謝罪文を出す必要を感じたというのは，この遠い過去の十字軍遠征が残した傷がいかに深かったかを証明している」[14]。

聖地エルサレムの回復は果されず，全くの的外れな侵略行為だったと非難される第四回十字軍であるが，どうしてこのようなことになったのか。実に，その経緯は複雑である。ヴェネツィアが関係してくるのは，船団の調達に絡んでのことであった。もともと十字軍はヴェネツィアと傭船の契約を結んでいたのだが，実際に参加した兵士の数が当初に予定されていた三分の一ほどしかなく，大きく見積もり過ぎて発注してしまったがために費用が支払えないという事態に陥った。その支払いの延期を条件にして，ヴェネツィアは十字軍に対しハンガリー王に奪われた都市ザラの奪還に協力するよう求めた。本来の趣旨とは全く異なる出兵であるが，十字軍はこの条件を受諾せざるを得なかった。が，ヴェネツィアの商業的権益が関わるのはここまでであって，コンスタンティノープルの陥落には関係しない。さらに別の要因が生じたのである。その頃，ビザンツ皇帝イサキオス 2 世が失脚し，その息子アレクシオスはドイツへ助命を願い出た。アレクシオスから多額の資金提供を条件に復権への協力を求められたドイツ王

---

[14] ジョナサン・フィリップス著，野中邦子・中島由華共訳（2007 年）『第四の十字軍―コンスタンティノポリス略奪の真実―』中央公論新社，16 頁。

フィリップは，その目的を遂行するように十字軍へ通達する。これによって十字軍はザラからコンスタンティノープルへ部隊を展開し，戦闘の末にイサキオス 2 世の復位に成功する。しかし，アレクシオスとの協約は反故にされてしまう。この経過において，十字軍はコンスタンティノープルを占領し，前述したような掠奪の果てに，新たにフランドル伯ボードワンを帝位に据えたラテン帝国を建国することになる。本来の十字軍の意図からは全くかけ離れてしまったと言わざるを得ない。

さらに，本来の意図から無関係の進軍として，教皇インノケンティウス 3 世によるアルビジョワ十字軍の派遣（1209 年）を挙げることができる。これは南フランスを中心に拡大した異端カタリ派の討伐を目的としており，聖地エルサレムの奪還とは直接関係がない。カタリ派の教勢はフランスの王権の支配が及ばない地方領主のもとで拡大していたため，この動きを取り締まるために教皇特使ピエール・ド・カステルノーが派遣されたが，トゥールーズ伯レイモン 6 世の配下によって殺害されてしまう。このことが発端となり，カタリ派の掃討部隊が南フランスのベジエ，カルカソンヌ，モンペリエに侵攻した。1226 年以降，その主導権は教皇からフランス王ルイ 8 世へと移行されたが，軍事展開は継続されることになる[15]。ここでもまた十字軍は聖地エルサレムの奪還という本来の意図から大きくかけ離れて，異端の撲滅を目指す軍事的行為の正当化というイメージを強く帯びることになったと考えられる。

---

[15] ミシェル・ロクベールは次のように指摘している。「十字軍という中近東の植民地戦争体制を，多少の細部を除いて，ほとんどそっくりそのまま取り入れたと言ってもよい「アルビジョワ」十字軍がおさめた最初の勝利の成果は，1212 年，エルサレム法令集〔十一世紀末，十字軍によってパレスチナに樹立されたエルサレム王国を統治するために作られた法令集〕に想を得た「パミエの法令集」によって正式に承認されたが，このことは，アルビジョワ十字軍というものが宗教と政治が密接に絡み合った複雑な企てであったことをはっきり物語っている。「聖戦」と喧伝され，相次ぐ勅令や教皇法令によって教会法上正当化された十字軍は，その成り立ちからして必然的に，封土権にもとづいて構成されていた当時の世俗システムと衝突することになる。この宗教紛争は，ときに錯綜した外交問題をはらみつつ，たちまちのうちにまぎれもない侵略戦争の様相を呈し始め，複雑に絡み合った現世的利害関係を巻き込みながら，にわかに国際的規模に拡大していった」（ミシェル・ロクベール著，武藤剛史訳（2016 年）『異端カタリ派の歴史―十一世紀から十四世紀にいたる信仰，十字軍，審問―』（講談社選書メチエ 635）講談社，39-40 頁）。

５．十字軍の顛末

1213 年に新たな十字軍が教皇インノケンティウス 3 世によって招集され，増援部隊がエルサレムに集結する。エルサレム王ジャン・ド・ブリエンヌが指揮を執って，エジプト遠征が企てられる。これを第五回十字軍と呼ぶが，敗退に終わる（1217-1221 年）。ブリエンヌの娘イザベラと婚姻関係であった神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世はエルサレム王を称して第六回十字軍を率いるが（1228-1229 年），外交的な手段によってエジプトのスルタン，アル・カーミル（サラディンの甥）とヤッフェ条約（1229 年）を締結し，聖墳墓教会を奪還することに成功する。しかし，カーミルの死後，イスラーム勢力によりエルサレムは陥落し，フランスのルイ 9 世（聖王）による第七回十字軍（1248-1254 年）が企図される。1249 年 6 月にダミエッタを占領し，1250 年 4 月にカイロへ進軍したものの，ルイ 9 世自身が疫病にかかって撤退を余儀なくされる。

この時期，イスラーム圏は台頭著しいモンゴル帝国の脅威に晒されていた。フラグ軍はペルシア全土を征服し，バグダードを攻略し，シリアへ西進していたが，この侵略を食い止めたのがエジプトで成立したマムルーク朝であった。マムルーク朝のスルタン，バイバルス 1 世は十字軍国家との和平を模索するが果たされず，アンティオキアを陥落させる（1268 年）。この後でルイ 9 世が再度出兵し，第八回十字軍を指揮してチュニスへ遠征するが（1270 年），その途上で死去し軍事展開そのものが頓挫してしまう。ついに 1291 年，マムルーク朝がエルサレムの首都アッコンを占領し，これをもって西洋キリスト教世界の軍事的敗北が決定する。

以上，十字軍の歴史を概観してきたが，いわゆる宗教戦争という名目を立てて宗教の対立にだけ原因を帰するのは正しくないことが分かる。戦争の動機付けを説明するために宗教的要因が過大に評価の対象とされることに対して反省が求められる。戦争という行為においては宗教，政治，経済の諸要因が複雑に絡み合って作用していると捉えられるべきであって，宗教戦争というレッテルのもとに事態の把握を単純化し，政治と経済の問題を不問にすることは何の解決も導かないと考えられる。その最たる例が十字軍であり，それは戦争の動機を粉飾するイメージとして利用されてき

たと理解することができる。西洋キリスト教世界において十字軍のイメージは聖戦意識を惹起し，侵略行為すらも正当化し得るイデオロギーとして使用され，あるいは異教徒を征服し，異端を討伐する大義としても活用される。つまり，十字軍というイメージが闘争的な排他性を隠してしまい，ある種の英雄主義を喚起するのである。逆にイスラーム世界において十字軍のイメージは被害者意識や脅迫観念を生み出し，西洋キリスト教世界に対するコンプレックスを助長させている。そのことについて，アミン・マアルーフが以下のように指摘している。「西ヨーロッパにとって，十字軍時代が真の経済的・文化的革命の糸口であったのに対し，オリエントにおいては，これらの聖戦（ジハード）は衰退と反開化主義の長い世紀に通じてしまう。四方から攻められて，ムスリム世界はちぢみあがり，過度に敏感に，守勢的に，狭量に，非生産的になるのだが，このような態度は世界的規模の発展が続くにつれて一層ひどくなり，発展から疎外されていると思いこむ。以来，進歩とは相手側のものになる。近代化も他人のものだ。西洋の象徴である近代化を拒絶して，その文化的・宗教的アイデンティティを確立せよというのか。それとも反対に，自分のアイデンティティを失う危険を冒しても，近代化の道を断固として歩むべきか。イランも，トルコも，またアラブ世界も，このジレンマの解決に成功していない」[16]。「恒久的に攻撃されているムスリム世界では，一種の被害者意識が生まれるのを阻止することができず，これはある種の狂信者のなかでは危険な脅迫観念の形をとる。1981年3月，トルコ人メフメト・アリー・アージャはローマ法王を射殺しようとしたのであったが，手紙のなかで次のように述べている。＜私は十字軍の総大将ヨハネ・パウロ2世を殺すことに決めた＞。この個人的行為を超えて明らかになるのは，中東のアラブは西洋のなかにいつも天敵を見ているということだ。このような敵に対しては，あらゆる敵対行為が，政治的，軍事的，あるいは石油戦略的であろうと，正当な報復となる。そして疑いもなく，この両世界の分裂は十字軍にさかのぼり，アラブは今日でもなお

[16] アミン・マアルーフ著，牟田口義郎・新川雅子共訳（2001年）『アラブが見た十字軍』ちくま学芸文庫，452頁。

意識の底で，これを一種の強姦（レイプ）のように受けとめている」[17]。

但し，これは十字軍のイメージが生み出した感情論に近いと言わねばならず，事実認識からは外れていると思われる。西洋キリスト教世界が侵略し続け，イスラーム世界が被害を受け続け，こうした構造は十字軍から連綿と続いてきたという認識は歴史的に必ずしも正しいとは言えない。聖地奪還を目指した歴史的事象としての十字軍は，西洋の植民地主義の起源ではあり得ない。直接の関係性がないにもかかわらず，十字軍というイメージの操作で両者を安易に結び付けてしまうのは，事柄を単純化し過ぎている。補足のため，ジョティシュキーの意見を引用しておきたい。「十字軍は，特殊な理由で，かつ特殊なさまざまな状況の組合せで起こったのである。東地中海がいまだに 1095 年に西方教会と騎士によってはじめられた戦争の後遺症に悩まされているというのは事実かもしれないが，これらの紛争が始まった状況は 11 世紀のヨーロッパと西アジアの社会の動きを反映したものなのである。十字架と三日月，つまりキリスト教文化とイスラーム教文化の価値観のあいだの戦いに歴史的必然性はまったくない」[18]。

十字軍のイメージを使ったレトリックによって，短絡的なイデオロギーの対立を煽ることは厳に慎まねばならない。今世紀に入ってからも「十字軍と背教者」（2015 年 3 月，チュニジアでのテロ），「フランスの十字軍」（2015 年 11 月，パリ同時多発テロ），「十字軍連合の参加国国民」（2016 年 1 月，ジャカルタでのテロ），「十字軍諸国の国民」（2016 年 7 月，バングラデシュでのテロ），「マンチェスターの十字軍」（2017 年 5 月，マンチェスターでのテロ）など，十字軍のレトリックは数多く見受けられる。負のイメージは独り歩きして憎しみをまき散らす。イメージによるレトリックの構成，その短絡的な使用に警戒が必要である。2023 年 10 月以降，イスラエルとイスラーム原理主義組織ハマスとの間に戦闘状態が続いているが，イメージによる憎悪の増幅が報復の連鎖を生み出し，ガザの悲劇に終わりが見えないことを思うと，いかに歴史が教訓となっていないかを痛感させられる。我々は，いつの時代もずっと十字軍の幻影に捕らわれてき

---

17 前掲書，454 頁。
18 アンドリュー・ジョティシュキー（2013 年），11 頁。

たのではないか。幻影の背後に渦巻く利権の構造，それをめぐる排他的な闘争，そして愚行を繰り返す人間の悲劇性を見抜くことが肝要である。言説の積み重ねによりイメージが形成され，それがイデオロギーとなって逆に言説を支配していくという循環の構造をどのように捉えていけばよいのか，またイメージ操作によって作り出された聖戦やジハードの概念をどのように克服していけばよいのか，批判的な検討が求められるが，それらの考察については稿を改めたい。

[参考文献]

アミン・マアルーフ著，牟田口義郎・新川雅子共訳（2001 年）『アラブが見た十字軍』ちくま学芸文庫。

アンドリュー・ジョティシュキー著，森田安一訳（2013 年）『十字軍の歴史』（刀水歴史全書 86）刀水書房。

エリザベス・ハラム編，川成洋・太田直也・太田美智子共訳（2006 年）『十字軍大全—年代記で読むキリスト教とイスラームの対立—』東洋書林。

ジョルジュ・タート著，池上俊一監修，南條郁子・松田迪子共訳（1993 年）『十字軍—ヨーロッパとイスラム　対立の原点—』（「知の再発見」双書 30）創元社。

浜本隆志編（2015 年）『欧米社会の集団妄想とカルト症候群—少年十字軍，千年王国，魔女狩り，ＫＫＫ，人種主義の生成と連鎖—』明石書店。

橋口倫介（1994 年）『十字軍騎士団』講談社学術文庫。

池上俊一（2007 年）『ヨーロッパ中世の宗教運動』名古屋大学出版会。

伊藤敏樹『十字軍「聖戦」秘譚：対立と融合の真実』（2015 年）原書房。

ジャン・リシャール著，宮松浩憲訳（2004 年）『十字軍の精神』（りぶらりあ選書）法政大学出版局。

ジョナサン・フィリップス著，野中邦子・中島由華共訳（2007 年）『第四の十字軍—コンスタンティノポリス略奪の真実—』中央公論新社。

カレン・アームストロング著，塩尻和子・池田美佐子共訳（2001 年）『聖戦の歴史—十字軍遠征から湾岸戦争まで—』柏書房。

ミシェル・ロクベール著，武藤剛史訳（2016 年）『異端カタリ派の歴史—十一世紀から十四世紀にいたる信仰，十字軍，審問—』（講談社選書メチエ 635）講談社。

ルネ・グルッセ著，橋口倫介訳（1954 年）『十字軍』（文庫クセジュ 133）白水社。
ロドニー・スターク著，櫻井康人訳（2016 年）『十字軍とイスラーム世界―神の名のもとに戦った人々―』新教出版社。
櫻井康人（2019 年）『図説　十字軍』河出書房新社。
櫻井康人（2020 年）『十字軍国家の研究―エルサレム王国の構造―』名古屋大学出版会。
新人物往来社編（2011 年）『十字軍全史』新人物往来社。
スティーヴン・ランシマン著，和田廣訳（1989 年）『十字軍の歴史』河出書房新社。
タッソ著，A.ジュリアーニ編，鷲平京子訳（2010 年）『エルサレム解放』岩波文庫。
山内進（2011 年）『北の十字軍―「ヨーロッパ」の北方拡大―』講談社学術文庫。
山内進（2017 年）『増補　十字軍の思想』ちくま学芸文庫。
八塚春児（2008 年）『十字軍という聖戦―キリスト教世界の解放のための戦い―』日本放送出版協会。